



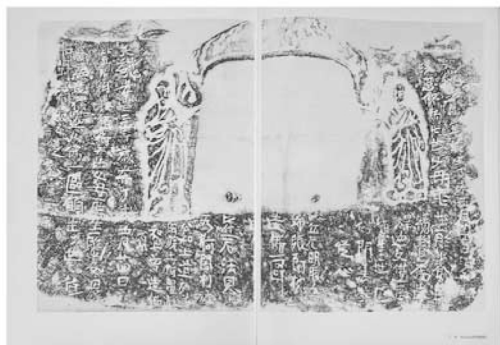
初唐の三大家の楷書の完成度の高さを知れば知るほど、手習いするのに臆病になり、逆に荒削りの北魏の楷書に親しみを覚え、その力強い筆画や重厚な構成、また素朴なたたずまいにひかれた。戦後、昭和49年(1974)中央公論社から『龍門造像題記』の大判の大冊が精印された(図版①)。特装本は、普及本の3倍の定価であり限定300部で画仙紙に整拓本が原寸大で精印されていた。この『龍門造像題記』の底本は、剪装本でなく、全て整拓本であり、二十品以外に龍門造像記が五十品収録されていた。普及本では、二十品の全体の整拓図版は縮印され、部分図版と五十品は原寸大で収録された。二十品は、『魏靈造像記』以外は、それほどの旧拓本でなかった。造像記五十品の大部分を占める北魏の小品造像記に興味を抱いた。龍門二十品のごく普通の原拓整本は早くに入手し、次第に質の優れた拓が欲しくなり、70年代に中国から輸入された整拓の龍門二十品の旧拓本を手にした。『魏靈造像記』、『孫秋生造像記』、『始平公造像記』、『牛嶺造像記』等が旧い状態を示しており、清雅堂や二玄社の叢刊本に比して遜色のない拓であった(図版②)。しかし、この頃に中国の文物出版社から新しく刊行された『龍門四品』や『龍門二十品』等の影印本には、北京図書館所蔵の、これまで未見の質の高い旧拓本が用い

「落ち穂拾い記」③③ 『龍門造像記』(上)

〔図版①〕「龍門造像題記」

中央公論社本

龍門造像題記



〔図版②〕

近拓 旧拓 文物本(最旧拓)



〔孫秋生造像記〕

〔祖香〕の二字損せず

近拓 旧拓 文物本(最旧拓)



〔牛櫛造像記〕

〔櫛〕の字損せず

近拓 旧拓 文物本(旧拓)



〔魏靈造像記〕

〔空〕の字損せず

〔図版③〕

中央公論本

未剝本(最旧拓本)



龍門



〔図版④〕 龍門全套



られており、戦前には見る事の出来ない優れた拓本であった。陽刻の『始平公造像記』は、「未剝本」と称される初拓に近い最旧拓であり、字面の保存状態の優れた拓であった(図版③)。また『孫秋生造像記』『牛櫛造像記』もこれまでの旧拓本よりも更に字面の保存状態の優れた拓であった。初めて北京に向いた1980年の秋に北京図書館で、龍門四品で紹介された『始平公造像記』の整拓旧本等を特別に見た記憶がある。この種の龍門の最旧拓本は、日本に将来されていなかったようである。80年代末に、神保町の玉川堂の齊藤さんから同窓生の友人の家に伝わる龍門の拓本を紹介され、譲り受けた。龍門全套と題された木箱に入られた全32冊の折帖の龍門拓本集であった(図版④)。2冊が、龍門二十品、他の30冊は、龍門造像の小品であった。約六百点ほどの小品造像記である。「龍門全套」の箱書きは、内山南海先生の筆であり、裏側の題記から内山南海先生の旧蔵であったが、昭和23年に御礼として譲渡された由が記されていた。この龍門全套の龍門造像小品を六百点余り複写して、龍門石窟の各種の資料等と比較対照し、あれこれ調べる内に二十品とは異なる素朴な龍門小品造像記(図版⑤)に魅せられた。

伊藤滋(書齋名・木鶏室)

書道芸術院

令和の群像 (2022)



「虚ろな違和感」

大隅晃弘 書



大隅晃弘

恩師と出会った高校の書道部では、専ら書作に明け暮れていた。恩師の真似事に終始し、幅広い門外の作風に目を向ける機会が少なかったかもしれない。大学での作品批評会では臨書と創作を問わず、制作意図と用筆や造形に関わる根拠等、細部にわたる説明責任が問われた。古典をどう捉えるか、用具用材の選択理由、素材となる詩歌の意味など、矢継ぎ早の質問が襲い掛かる。書作一辺倒で理論武装のなかった時分、私にとってこの批評会が苦痛で仕方なかった。しかし、この試練が現在の書作活動の貴重な骨格となっていることは間違いない。

大学在学中、恩師の模倣からの脱却を意識した頃、「書とは何か」という自問自答が始まった。『筆触の構造』をテキストにした石川九楊の集中講義に影響を受けた。大溪洗耳の『戦後日本の書をタメにした七人』を真に受けたわけではないが、公募書展の在り方については色々と考えさせられた。当時の私はそれなりの書道オタクを自負していたものだが、周囲も中々の強者揃いで、書に係る激論が交わされることが至極自然な環境であったことは有難かった。

改めて回顧すれば、私の心の何処かに常に書が存在がある。筆を持たずとも、無意識のうちに「書とは何か」と自問している。ある時、その答えを明確に捉えたかと思えたが、夢か錯覚のように答えは微塵と消えた。情報技術革新が進み、人々の価値観が

一層多様化する中で、書が果たす役割とは如何なるものか。「書とは何か」と同時に「書に何ができるか」は重要な問いとなりそう。

私の書に対する考え方は、高村光太郎の書論に注目し始めてから大分変わってきた。書が真に分かれれば、絵画も彫刻も建築も分かる筈であり、文章の構成、生活の機構にもおのずから通じて来ねばならない。書だけ分かって他のものは分からないというのは分かりかたが浅いに外なるまい。

学生の頃は、特に注目もしなかったが、今にして思えば、「書とは何か」、「書に何ができるか」の問いに対する多くの鍵が潜在内容に驚かされる。

* * *

良い書とは何か、目指す書とは何かを考えることがある。

書は自由奔放が良いと思うが、粗雑で乱暴なものを見ると心が疲れる。古典に準じて真面目で健全なものは安心するが、何か物足りない。様式を整えて技術が確かなものは感心するが、鼻に付いて寄り添えない。造形や線質に凝る表現過多は、騒がしく落着かない。

ずっと見ていたい書、新たな発見のある書、問いが生じ思考させる書、共感し寄り添える書……。そういう書が書けるよう精進したい。

書のひろば

理事長 下谷 洋子

第56回高野山競書大会盛會に

8月5日、金剛峯寺隣の大師教会の大広間にて表彰式が挙行された。本年は例年通り金剛峯寺賞以上125名を招待し、結果として110名余のご出席、付き添い者等を含め250〜300名余の方々が参列され、予想を超える賑わいとなった。やはり受賞者の歓び、関係の方々の応援など本展にかけける期待の高さ、展覧会開催の反響の大きさが強く感じられた。式では管長猥下に続き審査委員長辻元大雲が挨拶、献書目録奉読を種谷萬城が行った。式後の記念撮影会も無事終了した。

本展は8月26日(金)〜28日(日)、高野山金剛峯寺東京品川別院にて関東地区展が開催され、同展では審査委員長賞以上の特別賞が陳列される。(辻元大雲記)



高野山競書展表彰式

北日本支局で巡回展開催

7月28日〜31日まで坂本素雪支局長のもと、八戸市美術館にて盛大に開催されました。八戸市美術館は昨年新装され、高い天井、白い壁面のモダンな美術館です。そこに歴代会長をはじめとし香川峰雲先生の遺作3点、75回展の会員出品作及び一般の入賞者まで116点が陳列されました。北日本は、現代詩文書、前衛書が中心だが篆・刻字も若干加わります。気骨のある作品群が、真っ白な壁面に映え、北日本の皆さんの書に対する熱い思いが満ちみちていました。

北関東総局で巡回展開催

巡回展8ヶ所目として北関東総局展が、8月5日〜8日まで、高崎シティギャラリーにて開催されました。総局のため全館を貸し切ったの展示は、実にゆったりとして、峰雲先生の遺作も一部屋に収められ、巡回展作品も一同に見渡せるめぐまれた展示となりました。北関東総局展は会員候補以上の展示ですが、会員数の差はあっても5部門全てが揃う、総支局の中でも数少ない地域でもあります。

第73回毎日書道展関西展開催

8月17日〜21日、京都市京セラ美術館など3会場で開催された。第73回毎日書道展関西展が開催された。各地方展の中でも最大の規模であり、陳列数も約2,500点を誇るものである。

最終日の21日には今回展の実行委員

長柳碧輝毎日書道会理事の講演を皮切りに式典が行われた。講演は「美しい書について」と題してご自身所属の大字書部作品を元に、文房四宝の使い方、主に墨色の出し方についてお話しされた。磨墨方法、硯との相性、磨墨液のブレンドについて等々、40分という僅かな時間ではあったが有意義な時間であった。

その後、渡辺美明理事や各方面のご来賓をお招きして顕彰式が挙行された。本来ならば盛大な祝賀会が行われるところであるが、新型コロナウイルスの急速な感染拡大により急遽中止せざるを得なかったのが残念であった。

(前田龍雲記)

書道芸術院秋季展会員候補公募選考15人展他 作品確認など実施

本年の書道芸術院秋季展は、アートサロン毎日での「推薦作家展」の15人の作品は7月25日に、8月25日には財団役員含む選抜作家134点の作品確認を行いました。

審査会員候補公募作品の選考は、審査員6名により同日行われ、「秋季菊花賞」10名、「秋季俊英賞」40名が決まりました。応募は各部計299点、182名でした。

今年もコロナ禍の関係で10月8日に表彰式・作品研究会と「推薦作家展」作品研究会のみ開催します。

入賞者は左記の通り。

・秋季菊花賞(10名)

漢字	かな	現詩	前衛
斎藤 実	永井 明香	木村 関泉	岸 美悠
寺内 宏山	本郷 谷恵	川村 素舟	高島 洸蓮

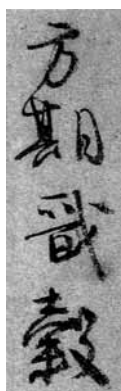
・秋季俊英賞(40名)

漢字	かな	現詩	前衛
伊藤 明秋	小関 瑞華	北口 松星	小松 美恵
岩崎 篁葵	鍛冶 翠香	小谷 翠香	酒井 城園
佐藤 明香	根橋 明香	田中 一葉	松村 美保
野村 知	遠藤 光葉	大友 四峰	齊藤 一翠
佐々木華鼎	前田 花峰	吉田 紫風	石井 和子
川田 弘子	坂井 初江	佐藤 糾舫	本田 美雪

現代詩文書基礎基本講座 (28)

小竹石雲

【祭姪文稿】 顏真卿 唐 (758年) 安史の乱で惨殺された甥の顏季明の霊に捧げた祭文の草稿。顏真卿の悲憤の激情がにじみ出た率意の書。



特徴

ゆったりとした結構と、粘りのある線質で書かれている。祭伯文稿、争坐位文稿と合わせて「三稿」と呼ばれている。

①写実的臨書



②発展的臨書



- ・粘りのある重厚さを出すため、やや短鋒気味で、争坐位文稿よりも速書きで書いてみた。後半は特に悲痛な激怒の叫びを感じる。
- ・筆先のあたりからの瞬発力が大切。甘くならないように心がけた。

- ・羊毛の短鋒で右の写実的臨書よりも速く書いてみた。
- ・渴筆とねじれで説得力のある線を心がけた。「方」「期」の歪みが相乗効果をあげ、気持ちの高ぶりを表出できたと思う。

基礎基本講座

前衛書基礎基本講座 (4)

千葉蒼玄

○毎日書道展部門

皆さんは、毎日書道展の募集規定を読んだことがあるだろうか？

- ・漢字 文字数が3字以上の漢字
- ・かな 和歌、俳句（写経、和様漢字）
- ・近代詩文 詩歌や現代文を題材にした作品
- ・大字 文字数が1字か2字の漢字、ひらがな、カタカナ
- ・篆刻 中国古代の文字篆書を石印材などに刻し、紙に押印
- ・刻字 自分で文字を書き、刃物を使い板・竹などに彫る

と記されている。さてそれでは前衛書はどう記されているだろうか。

・前衛書 可読性を超えた文字性、非文字性の作品

前衛書以外の部門は「文字」を規定しているのに対して、前衛書は、書かれる文字や書体ではなく、可読性を超えた作品という表現になっている。

さてそれでは可読性とはどういうことだろうか？ 掲載の文字を見ていただきたい。楷書の「風」から始まり、草書、かな、篆書、甲骨文字、英語、アラビア語であるが、書道の初心者にとっては「かな」までが可読と言えるだろう。もう少し勉強した人は篆書も読める（可読）かもしれないが、書をしていない人たちにとっては、楷書の「風」だけが可読性がある文字で、あとは可読性があるとは言えないのではないか。また、欧米の人たちにとっては英語だけではないか。漢字の書体は抽象造形にしか見えないのではないか。ましてアラビア語は私たちにとても抽象である。余談になるが、英語が左から書くのに対して、アラビア語は右から左に書く文字である。

このことでもわかる通り「可読性」とは、その人の知識により変化するものである。また読めたらと言ってそれを理解したことにはつながらない。書は読めて理解しただけでは本質はわからない。芸術とはそのものから感じるものが大切である。



Wind 風 風 風 風



特集 第73回 毎日書道展

国立新美術館 7月13日(水)～8月7日(日)
東京都美術館 7月18日(月)～7月24日(日)

第73回毎日書道展総評

下谷 洋子

一昨年中止となった毎日書道展は、昨年、コロナウィルス対策のため大幅に運営を見直して粛々と開催されたが、今年も、収束をみないコロナ禍のため、危ぶまれながらも無事に開催することが出来た。

昨年の経験から組織や運営内容などはほぼ踏襲し、合同会議など縮小出来るところは縮小した。鑑別審査については、今回は各部一斉に行い、出品点数は、昨年より少々減少したが、コロナも3年目に入り、ウクライナ戦争や異常気象と不安が膨らむ中、若干で済んだことは書表現に対する熱意が失われていないことと推測される。入選、入賞率などは昨年並みとなった。各部とも水準の高い作品がそろったとの感想を各審査副部長から伺っている。特にU23のハツラツとしたエネルギーの溢れる作品には、審査員もこんな時期だからこそ格別に、将来の毎日展に明

る光を感じたようだ。今回残念だった人も、次年度に向けてまた一步一步取り組んでほしい。

4月14日の事務局合同会議は、昨年同様出席者を限定し、各部主任以上の参加となった。なお、5月27日～29日の鑑別審査、6月1日～3日の審査は今回は元に戻り国立新美術館の審査室で各部一斉に行われた。各部とも感染を避けるため色々と工夫を凝らしつつ、例年通りの進行方法がとられた。

今回展は実行委員長・柳碧辭(大字)、審査部長・永守蒼穹(近詩)、総務部長・赤平泰処(漢字)、陳列部長・鈴木響泉(大字)の各氏、運営委員としては本院から半田藤扇(漢字)、広瀬舟雲(近詩)、崎井恵風(大字)、板垣洞仙(前衛)の各氏、当番審査員、会員賞選考委員他は、既報の通り。

全出品者を対象とする文部科学大臣賞には大字書部柳碧辭氏(朝聞)の「前」が受賞。会員賞には本院より前衛書部・宮崎芳玉氏1名が受賞した。その他毎日賞以下の各受賞者は別記に記載した。

東京展国立新美術館7月13日～8月7日、前期後期各Ⅰ/Ⅱ期、計4回の陳列替えで、東京都美術館は7月18日～24日まで理事二作目と東京展関係入選作、書の甲子園入賞作品も展示された。

東京展以降全国9会場にて地方展が開催される。ご支援ご協力をお願いしたい。

- ・関西展 8月17日～21日 京都市京セラ美術館ほか
- ・北陸展 8月21日～25日 富山県民会館
- ・中国展 8月23日～28日 広島県立美術館
- ・四国展 8月24日～28日 愛媛県美術館
- ・北海道展 9月7日～11日 札幌市民ギャラリーほか
- ・東北仙臺 9月19日～23日 アエル 松栄ホール
- ・東北仙臺 10月19日～23日 山形美術館
- ・九州展 11月1日～6日 大分県立美術館

・東海展 11月8日～13日 愛知県美術館ギャラリー
各地方展では作品展示とともに顕彰式などの各種催しが企画されているが、コロナ禍の影響で開催内容が大幅に変更されることも予想される。ご注意ください。

なお、審査会員以上は、この73回毎日展の出品作によって毎年来年の「現代の書 新春展」の出品者が選考される。和光展の役員以外の出品者は、本年は生年が西暦奇数年の審査会員以上から100人が推薦された。展覧会会期は、1月4日～9日 セイコーハウス銀座ホール、セントラルミュージアム銀座(本院関係)
和光展 小竹石雲、下谷洋子
セントラル展 大野祥雲、石井明子、坂本素雪、太田蓮紅、千葉蒼玄、山口仙草の各氏



前衛書部 宮崎芳玉

宮崎芳玉
(前衛書部)会
員
賞

前衛書に出会ってから50年。浜谷芳仙先生から心に響く言葉や資料、生きることへの力強いメッセージを、書を通してたくさんいただけてきました。その中で、自分の気持ちやその時の思いが書に出てしまい、書に対する姿勢を自分自身に問うことも多い日々でした。

この度、会員賞をいただき、書道芸術院の先生方や師匠、社中の仲間へのありがたい気持ちが沸き上がっています。もっと古典を学ばなくてはならない、感性をどう磨いていくのか、わからないことや足りないもの等、課題だらけです。その中で、書道芸術院という素晴らしい先生方がいらっしゃる場で、その書や姿を見られることは、これからの一歩につながります。

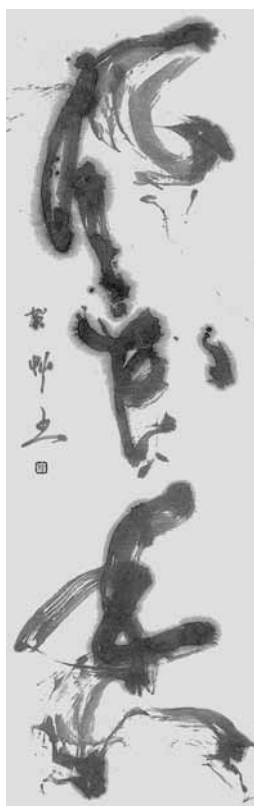
皆様ありがとうございました。

第73回展書道芸術院出品数（公募・会友）

書道芸術院	漢字		かな		近代 詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
本年度	180	192	122	139	415	171		42	355	1,616
72回展	152	199	123	144	421	186		52	393	1,670
増減	28	-7	-1	-5	-6	-15		-10	-38	-54

第73回展書道芸術院受賞者数

賞名	漢字		かな		近代 詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
会 員 賞									1	1
毎 日 賞	1	2		2	3	1			3	12
秀 作 賞	1	5	1	4	7	4		1	5	28
佳 作 賞	5	7	2	5	13	7		2	12	53
U23毎日賞				1					1	2
U23新鋭賞					1					1
U23奨励賞		1	1		1				1	4
合 計	7	15	4	12	25	12		3	23	101



漢字部Ⅱ類 本田 賀艸



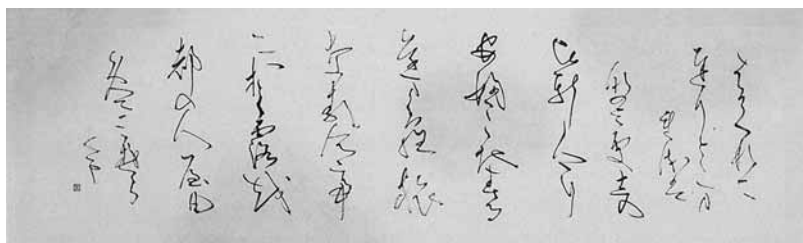
漢字部Ⅱ類 土屋 聖峰



漢字部Ⅰ類 妻藤 江葉



かな部Ⅱ類 東宮 香織



かな部Ⅱ類 徳 永 美恵子

毎日賞



近代詩文書部 安藤美悠



近代詩文書部 長南一恵



前衛書部 佐藤葵心



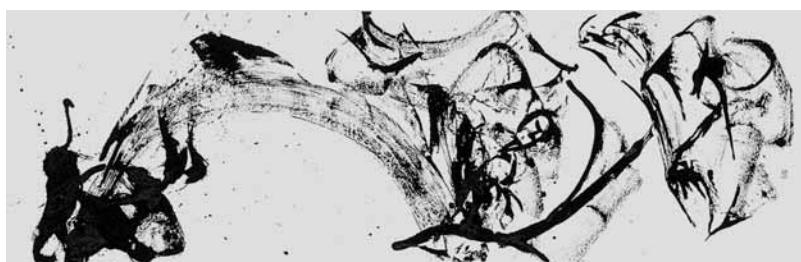
近代詩文書部 田澤館楓



大字書部 向井翠窓

毎日賞

前衛書部
高橋清琳



前衛書部 原島春汀

U 23 毎日賞



かな部Ⅱ類U23 熊谷 翔

前衛書部U23
木村朱音



秀作賞受賞者

佳作賞受賞者

・漢字部（Ⅰ類）

那賀思齋

・漢字部（Ⅱ類）

青木藤連

阿部雅悠

・かな部（Ⅰ類）

境野和子

・かな部（Ⅱ類）

齋藤杏邑

助川きみ

・近代詩文書部

新田雄山

大西香蘭

齋田舞夢

・大字書部

阿湯浜里佳

寺前華扇

・刻字部

葛西楊舟

・前衛書部

大野礼子

安藤楊風

・漢字部（Ⅰ類）

生田珠翠

望月考鳴

・漢字部（Ⅱ類）

小山内谷玲

小関瑞華

小泉潤

・かな部（Ⅰ類）

木村関泉

・かな部（Ⅱ類）

飯島律子

関口やよえ

・近代詩文書部

田中梢翠

齋賀清翠

椎木山風

茂木絢水

阿部緑玲

・大字書部

牧川逢扇

新井春麗

矢彦澤満

・刻字部

佐々木眸心

佐藤花梢

・前衛書部

西館四草

木原尚子

田子恵琉

伊藤聖子

早坂朋香

林一宏

青木朋美

寺島洋子

中塩朱華

河端祥桜

近藤桜紅

U23新鋭賞

・近代詩文書部

芳賀真桜

U23奨励賞

・漢字部（Ⅱ類）

富樫千尋

・かな部（Ⅰ類）

渡邊夏月

・近代詩文書部

廣瀬白鳥

・前衛書部

曾根麻由



佳作賞（副賞）「樺造筆置」（川北良造 監修）



秀作賞（副賞）「樺造文鎮」（川北良造 監修）



U23奨励賞（副賞）



U23新鋭賞（副賞）



U23毎日賞（副賞）

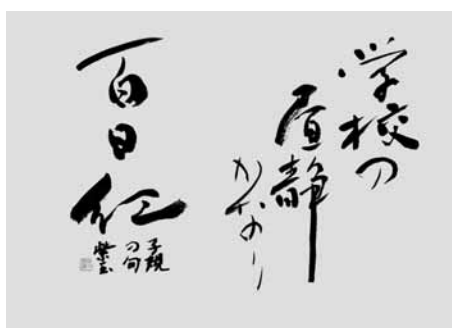
（川北良造：重要無形文
化財保持者（人間国宝））



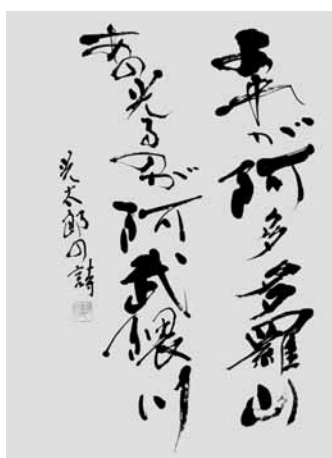
毎日賞（副賞）
「樺造筆筒」（川北良造 作）



毎日書道展会員賞（副賞）
「樺造花入」（川北良造 作）



長谷川 翠
(宮城)



「樹下の二人」
この度は、審査会員に昇格
させていただきありがとうございます。
ご指導下さる阿部
翠麗先生、宮城野書人会の先
生方、よき書友のおかげと感
謝申し上げます。今回の作品
は故郷の大好きな風景に思い
を込めて書いてみました。今後
も研鑽を重ね、書を楽しみな
がら精進してまいりたいと思
います。

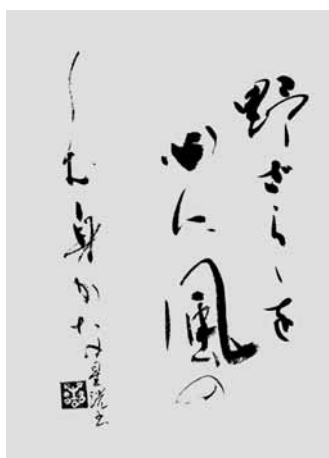
(翠)



笠原 紫玉
(東京)

「学校」
「書道の授業、楽しかったよ」巣立
つ生徒の励ましを頼りに、未だに右往
左往している私です。それでもこれま
で歩んでこられたのは、広瀬舟雲先生
をはじめ諸先生方のご指導の賜物と深
く感謝申し上げます。

(紫玉)



神本 星洸
(広島)

「芭蕉の句」
この度は審査会員にご推挙
いただきありがとうございます。
いつも温かくご指導くだ
さる小竹石雲先生はじめ諸先
生方、支えてくださる書友の
おかげと感謝申し上げます。
まだまだ思うような作品が書
けずにはいますが、書と向き合
う時間を大切に、日々精進
してまいりたいと思います。

(星洸)



高松 香風
(青森)



「修己以敬」
この度は、審査会員にご推
挙いただきありがとうございます。
いつもご指導くださる鳥山
岳風先生をはじめ、石心会の
諸先生に感謝申し上げます。
「自己の修養に努め慎み深
くする」謙虚に学び続けるこ
との大切さを胸に精進してま
います。

(香風)



青木 かよ
(群馬)



「花」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。ご指導いただき、ありがとうございます。ご指導いただいております大井美津江先生に感謝申し上げます。
日頃より作品制作では、構成、墨の濃淡また線質など苦心しています。今後さらに精進努力してまいりたいと思います。
(かよ)



小野 朱星
(宮城)



「楽」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。いつも熱心にご指導くださる大町青蓮先生はじめ書友の皆様感謝申し上げます。今回の作品は、書くことが、「楽しい」気持ちを表現しました。これからも古典を学び自分らしい書を表現できるよう、一層精進してまいります。
(朱星)



木原 尚子
(神奈川)



「内包」

この度は、審査会員へのご推挙ありがとうございます。牛歩ならぬ蝸牛の歩みながら書くことを続けてまいります。諸先生方に貴重なご指導を授かる環境に感謝しております。
(尚子)



栗原 りか
(群馬)



「躍」

この度は審査会員へご推挙ありがとうございます。白玄会の皆様や高校時代以来の倉林紅瑠先生のご指導と仲間との切磋琢磨のおかげです。書を学ぶ環境に感謝しつつ、さらに多様な表現を目指して努力してまいります。
(りか)



種谷 森城
（千葉）



「不斷」

今まで書を続けてこられた事、そしてその様な環境にいられた事を幸せに思います。コロナ禍での外出自粛で再認識した書の楽しさと続けていく事の意味。これからも作品制作の過程を楽しみながら、末永く書に親しんでいけたらと思います。この度は審査会員昇格、ありがとうございます。

（森城）



三浦 朱鳳
（宮城）



「観」

この度審査会員に昇格させていただき恐縮に存じます。これも千葉蒼玄先生・紅雪先生、ご縁を頂いた皆様のおかげです。特に紅雪先生の心遣いにいつも感謝です。いつしか書は生活の一部となり、この作品は、観音様に手を合わせた時の自分の気持ちをとっている書です。

（朱鳳）



柿沼 彩香
（千葉）



「感謝」

この度は、審査会員にご推挙いただき、誠にありがとうございます。師である辻元先生に出会って25年が経ち、常に温かく見守って下さる先生には大変感謝しております。子育て・仕事と1日24時間では足りない毎日ですが、先生や諸先輩方にご指導賜りながら精進してまいりたいと思います。

（彩香）

※令和4年度の新審査会員の紹介を終了いたします。

（編集部）



書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催 第23回九州支局展

特別展示 香川峰雲の世界

会期 令和4年6月16日(木)～19日(日)
会場 コスモイト行橋

- 1階 多目的ギャラリー
- 2階 企画展示室

実行委員長（九州支局長）

高田 幽 玄

書道芸術院創立75周年記念 役員作品巡回展及び特別展示『香川峰雲の世界』併催 第23回 九州支局展は6月16日から19日までの4日間、福岡県行橋市の「コスモイト行橋」を会場に多くの鑑賞者を集めて成功裏に終了することができました。

1階のギャラリーに役員作品巡回展63点、2階の企画展示室に九州支局展65点、特別展示スペースに「香川峰雲の世界」16点、合計144点を展示しました。展示空間について少々心配もしましたが、むしろ引き締まってまとまりのある会場であるとの辻元大雲理事長のお褒めのお言葉をいただきました。このような全国レベルの大きな書の展覧会が開催されるのは行橋市としては初めてのことです。

開催にあたり、行橋市文化協会の共

催、行橋市教育委員会、毎日新聞、西日本新聞の後援をいただきました。毎日新聞、西日本新聞で初日の朝刊に取り上げられ、またNHKには17日の「ニュースブリッジ北九州」で創立75周年のこと、香川峰雲のことを紹介していただきました。

19日は朝から行橋市文化協会茶道部による呈茶があり、来場者にお茶が振る舞われ大変好評でした。

本部からは理事長辻元大雲先生、常務理事小竹石雲先生の御来賓を仰ぎ、19日作品研究会では実際に執筆していただき、その見事な筆さばきと多くの見学者との心の交流は楽しいひとときとなりました。始まる前に、5月9日にご逝去された、前九州支局長の池田遊子先生のご冥福を祈り、黙祷を捧げました。

午後の作品研究においては、九州支局員に対する両先生の個性溢れるご指導に多くの参加者は感激しております。

辻元先生は院の全般的なこと、香川峰雲特別展のこと、作品に対する姿勢をもっと真正面から取り組むこと、他と勝負できる作品を書くこと、などの期待ゆえの厳しいご指導は改めて身引き締まる思いがしました。小竹先生のお話しの中で特に印象に残っているのは、初心者にはもったお手本は大切にしましょう、同時に時には手本を離れて冒險することも大事であるということでした。また毎日の練習を怠らないこと。鍛錬が必要であることを強調されました。

また、参加者の寄せられた感想に、「充実の展示には書の魅力が溢れていました」や「人を惹きつける書には、

表現者の情熱とたゆまぬ努力があることを思い知りました」などという、この展覧会と両先生の揮毫会、作品研究会に対する感謝の念が覗えました。

先生方の作品に対する的確なご指導は集まった者一人ひとりの脳裏にしっかりと刻み込まれたことと思います。なによりも両先生が本心に書を愛しておられることがよくわかりました。

このたび、辻元大雲先生の理事長御勇退が発表されました。19日の揮毫会終了後、先生に花束を贈呈いたしました。

思えば、九州支局にとって、種谷扇舟先生、恩地春洋先生と共に、辻元先生との長年にわたる関わりは非常に深く、特に気にかけていただいたわけですから、その勇退は誠に寂しいものがあります。

九州支局は二分、行橋、福岡が中心で会員数も多くない地域です。さらに会場が行橋市という地方都市ですので、このような大きな展覧会を引き受けるにあたって、いろいろな面で心配がありました。その上コロナ禍中ではありましたが、精一杯の運営とおもてなしをさせていただいたと思っております。

始まってしまえば、あっというまの4日間でした。今回の展覧会ほど、終わってしまったのが心から惜しいと思っただことは未だ嘗てありませんでした。

最後になりましたが、役員巡回展は、理事長辻元大雲先生、常務理事小竹石雲先生、市文化協会会長山田英俊先生のご指導、多くの出品者と九州支局役員との献身的な協力のお蔭をもちまして無事終了することができました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。



NHK、ニュース・ブリッジ北九州での放送



会場入口



第23回 九州支局展会場風景



役員作品巡回展会場風景



作品研究会、揮毫会集合写真 6/19



香川峰雲遺作特別展示



辻元、小竹両先生による揮毫



常務理事小竹先生による
作品指導



辻元理事長による作品指導



小竹先生による揮毫



辻元先生による揮毫

書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催 山陰支局選抜展・第44回鳥取県中央書道連盟会員作品展・第61回少年条幅作品展

会期 令和4年7月14日(木)～18日(月)
会場 倉吉博物館

実行委員長(山陰支局長)

名 越 蒼 竹

九州支局での巡回展に続いて、山陰支局では7月14日から18日まで、倉吉博物館を会場に、役員作品巡回展といくつかの併催展を開催しました。コロナ感染が広がりを見せ始めた時期でしたが、対策を行って無事終了することができました。心配していた入場者数も前回を上回る結果となり、喜んでいきます。

【作品展示】

役員作品巡回展は博物館の第一室と第二室の半分を使用し、余裕ある展示にはならなかったものの、「香川峰雲の世界」の展示も含めて全て展示できました。

また今回初の試みとして、全国学生展の大賞・準大賞の作品を展示しました。地元の子童生徒による第四室展示

の「少年条幅作品展」と比較して観ることで、指導者・出品者双方に良い刺激が得られたのではないかと思います。

役員作品巡回展と同じ第二室に展示した山陰支局選抜展は書道芸術院展審査委員会が出品しました。全員が漢字部所属のため、例年の中央書道連盟会員作品展には「かな」や「現代詩文書」も見られましたが、今回は全員が漢字作品を出品しました。そのため少し作風が単調な壁面となったように思います。逆に言えば書道芸術院の役員作品がいかに多種多様の表現に富むものであるかをアピールできたとも言えます。県内の他団体の方や地元の書道愛好者には、新鮮な刺激を与える結果となったと思われます。

第三室と別館「民俗資料館」に展示した山陰支局選抜展以外の中央書道連盟会員作品展は、一部の例外を除き、ほぼ全員が書道芸術院に出品している、中央書道連盟一般・無鑑査の会員の作品を展示しました。

【研究会】

今回はコロナ感染対策のため、博物館展示会場ではなく、地元の新日本海新聞中部本社二階ホールをお借りして行いました。本部から辻元大雲顧問と、下谷洋子理事長から急遽代わられた小竹石雲常務理事をお迎えし、初めに辻元顧問から書道芸術院の沿革と作品の解説、小竹常務理事から書に取り組む姿勢や考え方のお話を聞きました。

続いてお二人による席上揮毫会となり、半切に蘭亭序や鄭義下碑をそれぞれ臨書された後、全紙に現代詩文書を二作ずつ揮毫され、それぞれ抽選によって参加者にプレゼントしていただきました。会場は大いに盛り上がり、お二人の先生には、日帰りの強行軍にもかかわらず、時間いっぱい精力的に日程をこなしていただきました。

最後に、本展を開催するにあたり、他の総局支局から直接応援に駆けつけていただいたり、ご声援をいただいたことに感謝申し上げます。



巡回展 歴代会長作品



香川峰雲の世界 2



香川峰雲の世界 1



山陰支局選抜展 2



山陰支局選抜展 1



研究会 辻元大雲顧問による解説



研究会
揮毫後お話しされる辻元大雲顧問



巡回展 会場にて
辻元大雲顧問と小竹石雲常務理事



研究会 小竹石雲常務理事による臨書



研究会 辻元大雲顧問による臨書



研究会 両先生の揮毫に見入る参加者



研究会 作品プレゼントで抽選くじをひかれる
辻元大雲顧問

書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催 北日本支局展

会期 令和4年7月28日(木)～31日(日)
会場 八戸市美術館
ギャラリー展示室

実行委員長 (北日本支局長)

坂 本 素 雪

八戸市での開催は実に20年ぶりである。旧美術館は手狭で暗く、55回展以降70回展まで青森市民美術展示館で開催を余儀なくされていた。昨年八戸市に新美術館が完成、待ちに待った開催であり出品者数が半数を占める八戸地区の方々は喜びも一人であっただろう。巡回展の準備は昨年11月に第1回実行委員会を発足し、期日を7月末から8月にかけての「八戸三社大祭」に重ねて開催する事にした。前回まで青森市で開催した際は「ねぶた祭」と開催時期を同じにして集客動員を考えたので、今回は「八戸三社大祭」に合わせようと思った。ところが山陰支局の巡回展とバッティング、山陰支局長の名越蒼竹先生に何とか調整していただき、ようやく開催日が決定した。名越蒼竹先生には本当に感謝感謝である。振り返っ

てみると、役員巡回展と併催して北日本支局展も開催するので、2月の第75回書道芸術院展に出品した北日本支局の出品点数を把握することから本格スタートとなったのである。新美術館はワクワク感もあるが実績がなくデータ不足で苦悩の連続である。7月17日八戸市美術館に於いて開催日前の最後の実行委員会を開催、会期全体の工程表を今回の総務部長柳町祥香先生から詳細な説明。辻元大雲顧問や下谷洋子理事長の八戸市到着時間や席上揮毫、作品解説等の確認。そして一番の難問は新美術館の陳列である。担当は、杉本敦子先生。壁面計算をして図面に記載するようにと申し入れをしていたが、大変な仕事だったと思う。緻密に計算された図面が提出された。本人がコロナの濃厚接触者のため、残念ながら出席できず後は搬入日等待つのみとなった。出品点数は、一般公募入賞者9点、無監査29点、審査会員候補40点、審査会員37点、遺墨1点、計116点の作品に巡回展役員作品63点プラス2点の181点の展示である。7月27日午前10時搬入、北日本としては珍しく猛暑であった。搬入時刻に合わせて東洋額装から巡回展の役員作品が到着するのだろうか、又地方の表具店や個人持ち込みの方は間に合うだろうか、不安でなかなか落ち着かない。ニュースでは青森県のコロナウイルスの感染率が全国でもトップクラスに上がり、その中でも八戸市が最高記録の連続。開催すら危ぶまれ

る状況である。杉本敦子陳列部長も無事乗り越えて出席。壁面ごとに図面を置き一般、無監査、会員候補、審査会員、役員巡回展と班構成をして作業分担。少々手狭であったため、色々と協議の結果残念ではあるが香川峰雲先生の作品を三点に絞り展示することにした。7月28日初日客入りが心配される。折しも漫画家で「十一匹のねこ」で著名な馬場のぼる(地元三戸町出身)の展示会も開催されており相乗効果にも期待した。新美術館は市役所の向かい側にあり立地条件も整えて上々の入場者数確保。平穩無事を願っていた時、7月30日突然大変な事が起きた。辻元大雲顧問を迎え作品解説と席上揮毫が始まったその時、予定になかった、臨書についてのトークショウが始まったのである。いきなり振られてタジタジだったことしか覚えていない。その挙句お前も書けと。私は恥をかいたが見事な辻元大雲顧問の筆さばきに拍手喝采でしばし見とれていた。夕方大雲顧問とすれ違いで下谷洋子理事長が来青。最終日の31日は書道芸術院の歴史と立ち位置の講話。そして席上揮毫。「かな」作家のいない北日本支局としては、もったいない揮毫である。皆さんがうっとりして観覧していたのが印象に残る。



陳列完了



八戸市美術館外観



辻元顧問作品解説



会場風景



辻元顧問・坂本支局長による作品揮毫



辻元顧問・坂本支局長による作品揮毫

下谷理事長席上揮毫



坂本支局長

辻元顧問



かな条幅作品揮毫

かな半紙作品揮毫



書道芸術院創立75周年記念

役員作品巡回展

併催

北関東総局作家展
特別展示香川峰雲の
世界含む 学生書道展

会期 令和4年8月5日(金)～8日(月)
会場 高崎シティギャラリー

実行委員長(北関東総局長)

金井如水

2年半前、突然始まったコロナウイルス感染症に様々な活動の制約を受ける中、5年ぶりとなる巡回展を開催することとなった。今回は記念すべき院創立七十五周年。その歴史の重みに身が引き締まる。

芸術院展本展の余韻もさめやらぬ4月、第1回目の実行委員会が開催された。心配された地元会員の参加は前回より若干減少したが113名が出品。巡回展役員作品63点、歴代会長作品6点、香川峰雲先生の遺作17点、総計199点を学生展の優秀作品を加えると実に200点を超える展覧会となった。

会場は、前回同様高崎シティギャラリー。1階と2階の全7室を使用した。総壁面長310メートル、間隔をたっぷりとった、ゆったりとした展示になる。各方面にご後援を依頼、出品票を配

布・集約して全出品者の名前の入った独自の案内ハガキ、目録、看板の作成が進められた。

今回の会期は、会場確保との関係から、群馬県書道協会主催の教育書道展とほとんど重なってしまうという大変厳しい日程ではあったが、掛け持ちをする多くの会員の献身的な働きで順調に進めることができた。8月4日、午後1時、搬入・陳列。巡回展の作品と香川先生ほかの遺作の展示は東洋額装さんに大変お骨折りいただいた。会員の高齢化は否めないがけがや事故もなく計画通り無事陳列作業を終えることができた。

明けて5日、開幕。やはり教育書道展の授賞式前日と言うこともあって出足は穏やかな感じであったが、それでも扉が開くのを待ちかまえてご来場下さる県役員の先生方の姿があった。

一日おいて、7日、日曜日は、午後1時より第1展示室にて作品解説会を企画した。午前10時半、前日岡山より前泊でお越し頂いていた小竹石雲先生、この日仙台から新幹線で駆けつけて下さった後藤大峰先生のお二人を迎えて新理事長下谷洋子先生のご案内で会場を一回りしていただく。今回は、解説会の最後に審査会員候補出品者の中からそれぞれ3名ずつ眼にとまった作品を発表していただく予定。両先生の目が光ります。昼食を挟んで午後の本番を迎えようとする頃、千葉からは、前理事長の辻元大雲先生もご到着。理事長、常務理事の4名の先生が一堂に会すると言うことは滅多に無いとのこと、それだけ北関東に寄せる期待が大きい

と言うことか。

定刻通り解説会の開始、70名を超える方々を前に実行委員長挨拶。続いて下谷洋子新理事長から「院のこれまでとこれから」となる予定でしたが、せっかく辻元先生がいらっしゃるのですからと大雲先生より院の歴史と巡回展の意義について詳しいお話を頂きました。小竹常務理事からは、「書展のめざすもの」と題したレジュメも頂き書作と自己表現について示唆を頂く。後藤常務理事からは第3代会長・香川峰雲先生の世界について、ご家族とのエピソードも交えてその前衛的制作のお姿を語っていただきました。

最後に午前中に会場にてお選びいただいた「小竹石雲の眼」「後藤大峰の眼」を発表。ご持参いただいた記念品を贈呈いただいて会を閉じました。

会期中は毎日が猛暑の中でしたが、ギャラリー開設当時の前市長松浦幸雄氏、県書道協会丸橋鳴峰会長はじめ4日間で700名近い方々にご覧頂く事ができました。

遠く栃木、埼玉より駆けつけて下さった会員はじめすべての皆さんに感謝しつつご報告とさせていただきます。

(西川翠風記)



会場入り口



第1展示室の巡回展作品



エントランスと外看板



印の実物展示



香川峰雲遺作展



第2展示室 北関東の作家展



作品を選ぶ小竹常務理事



2階会場風影



下谷理事長のご挨拶



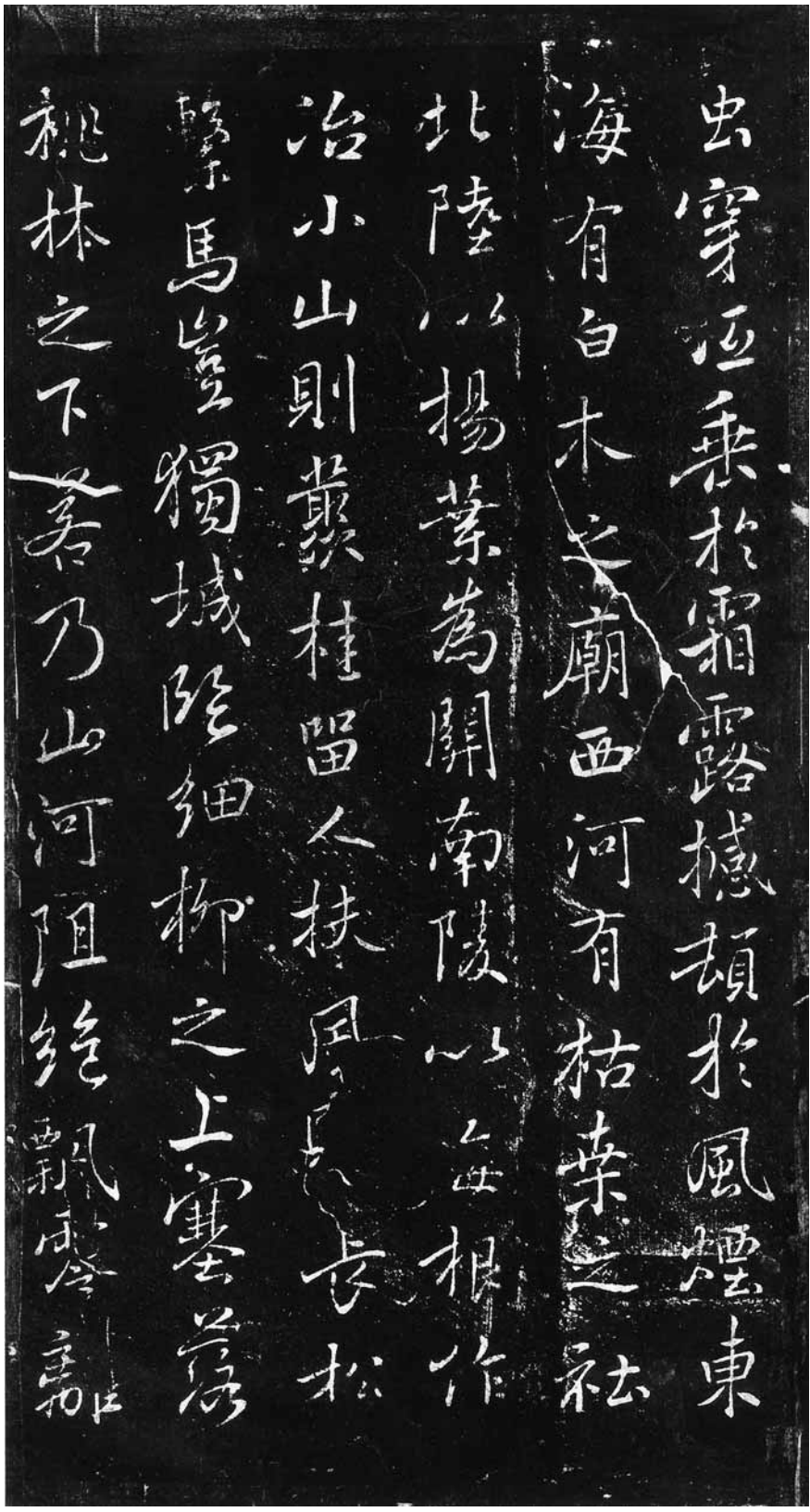
院の歴史を語る辻元大雲先生



後藤常務理事の「香川峰雲の世界」

枯樹賦(唐 630年) ③

褚遂良



〔解説〕 枯樹賦の真跡は宋代に失われ、現存しない。現在その刻本が『戲鴻堂帖』『聽雨樓帖』『玉煙堂帖』などの集帖に収められているのみである。褚遂良の書の本が最も精巧に刻されているとの評がある。褚遂良の書のおかげで、枯樹賦と雁塔聖教序に俯仰法による特徴ある筆使いを多く見ることが出来る。褚遂良は王羲之の手法を継承しつつも、俯仰法を交えたことで、線に響きや緊張感を漲らせ、自然な動きを伴って暢達さを見せている。中国では、初唐の頃から俯仰法の使用が盛んになった。わが国では、空海の風信帖と座右銘、嵯峨天皇の光定戒牒、橘逸勢の伊都内親王願文など「三筆」の名跡に俯仰法が顕著に認められる。「現代書道の父」と呼ばれる比田井天来(1872-1939)は、雁塔聖教序と唐太宗の温泉銘の研究から俯仰法の用筆を解明したと言われている。(編集部)

虫穿。低垂於霜露。撼頓於風煙。東海有白木之廟。西河有枯桑之社。北陸以楊葉爲關。南陵以梅根作冶。小山則叢桂留人。扶風則長松擊馬。豈獨城臨細柳之上。塞爲桃林之下。若乃山河阻絕。飄零羣鳥。

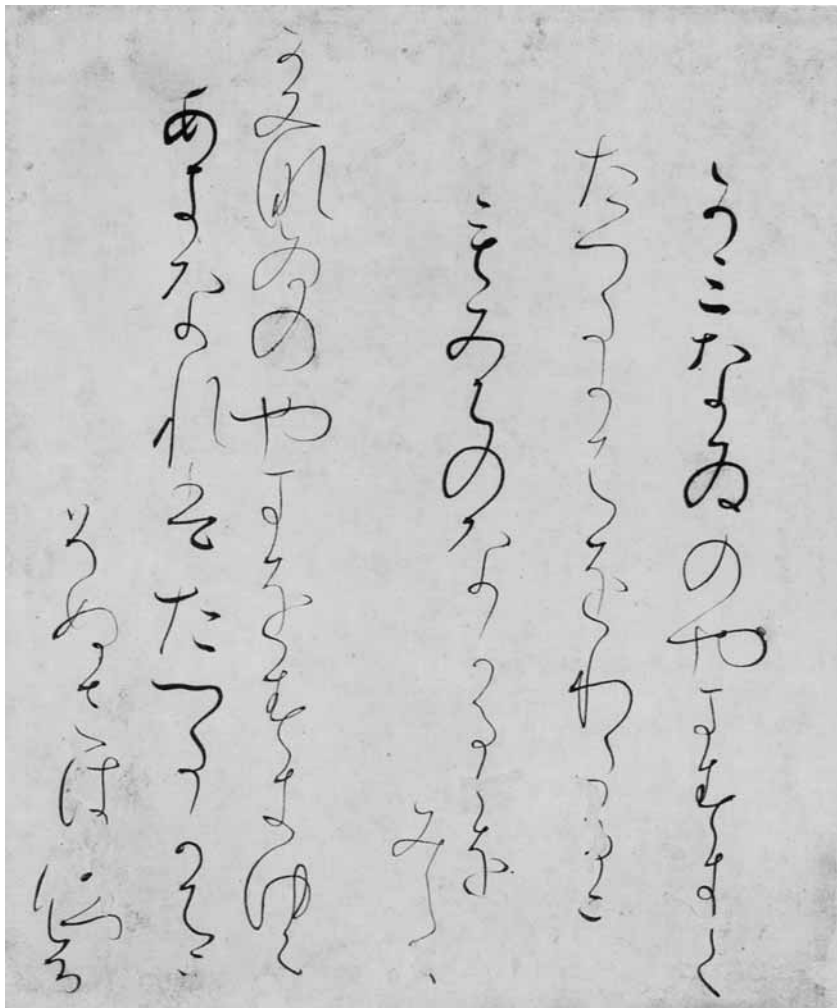
(掲載図版・75%に縮小)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみ可)

漢字研究部臨書課題 (半紙普通判・縦使用) 上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 (A.大作の部 毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B.小品の部 半切1/2以上半切1/4以内、全紙1/2以内も可(A・B縦横自由))

当該古典の上記掲載部分以外も可。



（三井文庫蔵）

〈よみ〉

かみなるのやますぎて
たつたがはをわたるに
もみちのながるゝを

かみなるのやますぎて
あきなればたつたがはに
ぞぬさはかづける

〈解説〉継色紙・寸松庵色紙・升色紙は「三色紙」とよばれ、流麗な筆線による連綿の美しさと、わが国特有の表現法である散らし書きによって、平安時代の仮名美の最高峰に位置づけられている。

散らし書きとは、これらの古筆のように、各行に長短や高低、傾きに変化をつけたり、行間に広狭の変化をつけたりすることによって、余白とのバランスを図りながら文字群を構成する表現方法である。

「三色紙」はもとは冊子本であったが、一首ずつに切り離されて色紙としての鑑賞の対象となった。（編集部）

※掲載図版は原寸。

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

かな研究部臨書課題

（半紙普通判（料紙可）を縦長に使用）半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。別紙を裁断して貼付も可。〈上記古筆の掲載部分を書く〉

特別研究部臨書課題

A. 大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部＝半切 $\frac{1}{2}$ 以上半切以内、全紙 $\frac{1}{2}$ 以内も可（A・B縦横自由）
〈いずれも上記の掲載部分以外も可〉

漢字規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書

習い方解説 ⑥

辻元大雲

秋聲萬壑哀

(秋声万壑哀し)

(呉景熙)

隸書表現の5文字です。聲・萬は旧字体で表現します。

隸書表現は横広の字形から、半紙では5、6文字表現が向きます。

これまでの行草表現と異なり、安定感あるバランスよい字配りが肝要です。隸書の特徴である、水平、横広、蔵鋒、波磔表現など、基本的な用筆や字形をしっかり会得した上での表現を。落款は行書で調和させました。



秋聲萬壑哀

よみ (秋声万壑哀し)

書体 自由

漢字規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田 藤扇 選書

秋露如珠

藤扇



秋露如珠

よみ (秋露珠の如し)

書体Ⅱ楷書

習い方解説 ⑥

半田 藤扇

秋露如珠 「現代書作必携」
(秋露珠の如し)

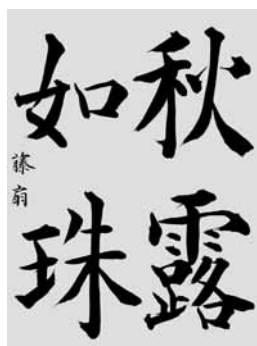
最後となりました。今回は「唐の四大家」の一人として後世に大きな影響を与えた顔真卿の書法を用いてみました。

「藏鋒」の技法を確立し、力強さと穏やかさを兼ね備えた独特の楷書体。「蚕頭燕尾」が特徴の顔法は、時代を代表する革新性をもっていた。顔勤礼碑・顔氏家廟碑・多宝塔碑など名品が多数ある。

※羊毛筆を使用

今回、勉強してまいりました楷書体を創作活動に是非とも活かしてみましよう。

〈参考作品〉



かな規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書

習い方解説 ③

平川峰子

いにしへの硯洗ふや月さしぬ

（加藤楸邨）

いにしへの硯洗ふや月

かき
加藤楸邨

よみ方 いに(示)しへの(能)硯洗(あら)ふや月さ(佐)しぬ(楸邨句)

創作

俳句の作品は、文字数が少ないので構成が肝心です。俳句を選ぶ時、伸ばせる文字が含まれていると構成がしやすくなります。この場合しが二つあるのと、に(示)とやが含まれていることです。には変体がなの耳にすると縦長くできます。

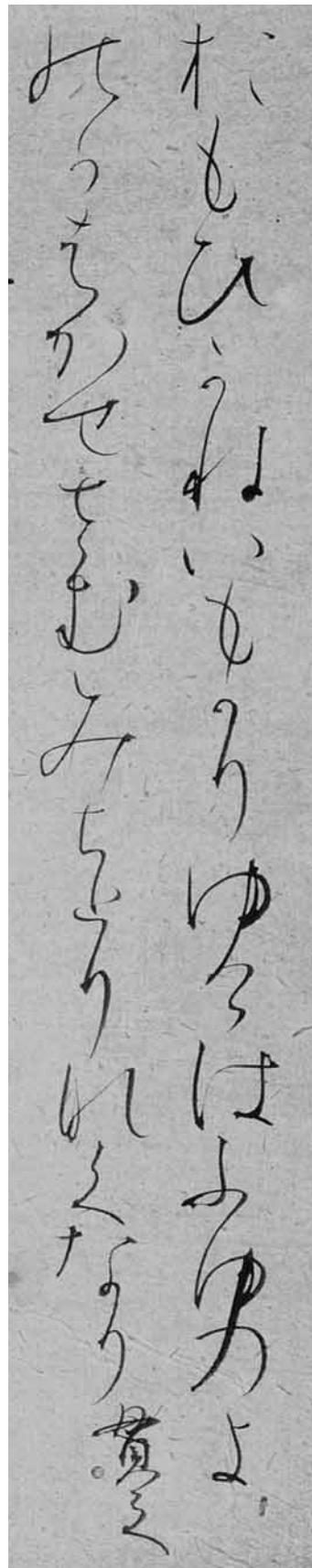
また、俳句は作家の意志を尊重して、なるべく変体がなに置き換えないうようにしていますが、書作品として美しく観せることが大切です。どの字に置き換えて構成するか字典で調べてください。墨継ぎは月でしました。

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。

かな規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）



よみ方

お(於)もひか(可)ねいもが(可)りゆけ(介)ばふゆのよ
の(能)か(可)は(者)かぜさむちどりな(那)く(久)なり貫之

習い方解説 ③

小島 孝 予

秋草やぬれていろめく籠の中
（飯田蛇笏）

かな条幅規定 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可）

小島 孝 予 選書



よみ方 秋草（阿支久佐）やぬれて（享）い（以）ろめ（免）く（久）籠の中

創作

※タテ形式に限る

飯田蛇笏の俳句です。初秋の爽やかなイメージの表現を心がけました。墨量は控え目にし、線が単調にならぬよう、穂先の開閉で変化をつけ、渴筆で大らかな流れを表現しました。また「秋草」を変体がなで1行目に置くことで、2行目の「籠の中」が全体を引き締めます。行間と流れに工夫し、豊かな表現を研究してみましよう。

漢字条幅規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

習い方解説 ⑥

種谷萬城



清風徐來、水波不興、舉酒屬客、誦明月之詩、歌窈窕之章 (蘇軾「前赤壁賦」)

(清風徐るに來って、水波興らず。酒を挙げて客に属し、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌う。)

書体Ⅱ自由

出品券
貼付位置

漢字条幅規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

習い方解説 ⑥

千葉蒼玄



月來池上花光淨 雨過園林竹露濃 (袁宏道詩)

書体Ⅱ自由

智永「千字文」



「月は池上をてらして蓮花淨く、雨は園林を過ぎて竹にやどる露もこまやかである。」の意。

漢字は康熙字典によると5万字ほどだが、編纂してこの文字数だから、消えていった文字を考えると途方もない数である。しかし漢詩にはそれほどの種類は出てこない。今回の文字も「来、花、雨、林、竹、露」などは頻繁に出てくる。この草書を覚えただけでも、字典を調べなくとも行草作品は書けるものである。

横形式に漢簡を参考に書きました。20世紀初頭に、中国西域の遺跡から、肉筆文書である漢代の木簡が多数発見され、その後の発掘調査で、中国各地から簡牘が大量に出土しました。漢簡には、筆の穂先の開閉を自在に用い、生命感に溢れ、躍動的な線が見られます。特に装飾的な波磔には、多彩な表情があり、大変魅力的です。

※ヨコ形式に限る

習い方解説 (六)

北村白琉

私の最後の課題として棟方志功の言葉を
選びました。

雅休は志功と親交が深く、前号で紹介し
た短歌の他にも「われら四人素裸に汗しと
どなりわれは書をかき堂主は絵をかく」の
歌があり、「かく」ことへの思いをひとつ
に意気投合し、共に筆を揮われたのだと思
います。合作も多く遺されています。

志功のこの言葉は前衛書からペン字まで
すべての分野の書にも通じる教えではない
でしょうか。

われわれの仕事にめだった
美しい形や色はなくとも
何かつよいものが、命が脈打つて
いなければならぬと思ふ。
棟方志功の言葉 白琉書

書体＝自由

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(14.8×10cm)を守って下さい。

われわれの仕事にめだった

美しい形や色はなくとも、

何かつよいものが、命が脈打って

いなければならぬと思ふ。

棟方志功の言葉より

長月 清涼 静岡県 山梨県

長月 清涼 静岡県 山梨県

朝晩は秋の気配が漂うようになりました

朝晩は秋の気配が漂うようになりました

西川 翠嵐

(掲載手本90%に縮小)

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

(楷書) 長月 清涼 静岡県 山梨県
(楷書) 朝晩は秋の気配が漂うようになりました

(行書) 長月 清涼 静岡県 山梨県
(行書) 朝晩は秋の気配が漂うようになりました

基本用語 「長月」旧暦9月の別称。「清涼」
涼しげで爽やかな意。

木一作品 各部総評

NO. 735

漢字部 師範 鷲山 美梢

ゆったりとした呼吸使いの中に筆者の強い気概を感じる。力むことのない豊潤な線が魅力的。

◎漢字部総評 字典で正しい崩しを確認して、古典をより処とするための多角的な臨書を怠らないこと。多書するしかない。(石雲評)



かな条幅部 四段 草刈 眞華

大らかなリズムで1行目、特に流れが美しい。墨継ぎによる墨量も巧み。渴筆が弱いので研究を。◎かな条幅部総評 行尾の処理に苦慮した様子。極端に右行に傾くのは不自然。墨の濃度は流れを左右するので注意したい。(洋子評)

現代詩文書部 特選 坂口 和美

破筆の効果と墨量の変化を生かした大字部と瀟洒な小字部のバランスが繊細な美しさをみせている。

◎現代詩文書部総評 現時に関する書籍等紐解くことも上達への近道かもしれません。(宗苑評)



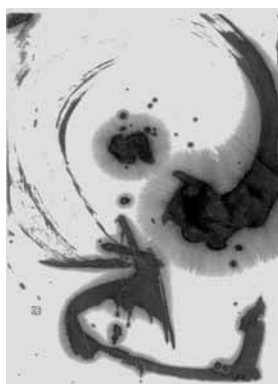
漢字条幅部 師範 栗原 華泉

条幅の布置章法をバランスよく取り入れ見事な作品を創り上げた。落款まで統一され秀逸作となった。

前衛書部 特選 工藤 和香

構成が巧み、墨色美しく紙面全体が躍動感あり明るい作品に仕上がっている良作。

◎前衛書部総評 墨色の表現、紙面の構成、線の工夫を大事に。(仙岳評)



◎漢字条幅部総評 表現多種の作品に魅了されたが、線の響きの甘さも若干あった。日頃の古典学習で鍛える事を望みます。(藤扇評)

石識 廬山真面目只縁手在此中



ペン字部 師範 浅野 弘美

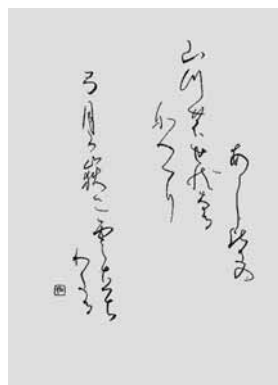
暢達した筆致抜群です。優美な表情を醸し、格調高い。布置も巧みで技術の高さが窺える作品です。

◎ペン字部総評 行書、かな連綿作品が大半。かなを無理なく自然に続けるには、連綿の方法を正しく理解することが大切。(紅瑤評)

のびのびとした書を書くこと、に下さい。生き生きとした書を書いて下さい。個にかかった若手のやうにびろびろと、勾深い書を書いて下さい。大澤雅休の書格より 弘美書

かな部 師範 関口やよえ

字形良く流れの美しい作品である。字粒の大きさが絶妙で引き込まれるような線質を生み格調高い。◎かな部総評 字の大きさを把握できなかった一部を除きレベル高い仕上がりであった。モダンな表現の万葉集が多く興味深い。(明子評)



選評 大平邑峰

◎実用書部総評

今月も力作揃いで審査に苦慮した。用紙に対する文字の大きさ、線の太さ等を工夫して、余白の美しい作品を目指してほしい。
(邑峰評)

特選 吉田 裕

よく練習されており、呼吸の乱れなく最後まで書き通している。

文月盛夏千葉県東京都
文月盛夏千葉県東京都
連日厳しい暑さが続いておりますが
連日厳しい暑さが続いておりますが
吉田 裕

特選 濱田 竹雪

字形確かで、構えも大きく、墨の使い方もよく心得ている。

文月盛夏千葉県東京都
文月盛夏千葉県東京都
連日厳しい暑さが続いておりますが
連日厳しい暑さが続いておりますが
濱田 竹雪

特選									
桐会	吉田 裕	洞書	濱田 竹雪	深大	多胡 三千代	誠和	石崎 甘雨	秀作	石井 恵子
江龍	猪股 白慧	立精	奥村 美楓	大雲	小林 裕子	啓佳	春日 嘉江	清月	小川 美梢
玉川	鷺山 綾奈	大雲	佐藤 綾奈	芳蘭	渡邊 信溪	桜草	苗代 佳恵	芳蘭	渡邊 信溪
佳作	英峰	紅瑤	藍澤 白珠	深大	岩上 光子	高真	落合 敏苑	秀苑	加藤 翠陽
正華	加瀬 明日夏	うる	篠原 楊流	生大	千葉 有秋	田村 春華	田中 勝見	生大	千葉 有秋
入選	紅瑤 相澤 敦子	八街 逢沢 唯一	華仙 柳瀬 奈津	八街 松野 美芳	八街 松野 美芳	八街 松野 美芳	八街 松野 美芳	八街 松野 美芳	八街 松野 美芳
立精	千田 白香	堀雪	津田 李花	耕雲	外山 文恵	書泉	永井 伯泉	蒼田	中山 知子
土氣	新井 翠芳	八街	中山 知子	蒼田	中山 知子	蒼田	中山 知子	蒼田	中山 知子
大阪	西野 翠美	蘇我	原 文子	蘇我	原 文子	蘇我	原 文子	蘇我	原 文子
若葉	本間 幸子	石智	松丸 愛石	八街	松丸 愛石	八街	松丸 愛石	八街	松丸 愛石
宗苑	松山 峰生	八街	松山 峰生	八街	松山 峰生	八街	松山 峰生	八街	松山 峰生
文筆	熊谷 芳博	文筆	熊谷 芳博	文筆	熊谷 芳博	文筆	熊谷 芳博	文筆	熊谷 芳博
素雪	坂本 芳博	素雪	坂本 芳博	素雪	坂本 芳博	素雪	坂本 芳博	素雪	坂本 芳博
英峰	佐々木 恵理子	英峰	佐々木 恵理子	英峰	佐々木 恵理子	英峰	佐々木 恵理子	英峰	佐々木 恵理子
華仙	椎木 須美子	華仙	椎木 須美子	華仙	椎木 須美子	華仙	椎木 須美子	華仙	椎木 須美子
有秋	高橋 千代子	有秋	高橋 千代子	有秋	高橋 千代子	有秋	高橋 千代子	有秋	高橋 千代子
千葉	高橋 千代子	千葉	高橋 千代子	千葉	高橋 千代子	千葉	高橋 千代子	千葉	高橋 千代子
田村	春華	田村	春華	田村	春華	田村	春華	田村	春華
生大	千葉 有秋	生大	千葉 有秋	生大	千葉 有秋	生大	千葉 有秋	生大	千葉 有秋
うる	篠原 楊流	うる	篠原 楊流	うる	篠原 楊流	うる	篠原 楊流	うる	篠原 楊流
正華	加瀬 明日夏	正華	加瀬 明日夏	正華	加瀬 明日夏	正華	加瀬 明日夏	正華	加瀬 明日夏
秀苑	落合 敏苑	秀苑	落合 敏苑	秀苑	落合 敏苑	秀苑	落合 敏苑	秀苑	落合 敏苑
高真	岩上 光子	高真	岩上 光子	高真	岩上 光子	高真	岩上 光子	高真	岩上 光子
深大	藍澤 白珠	深大	藍澤 白珠	深大	藍澤 白珠	深大	藍澤 白珠	深大	藍澤 白珠
紅瑤	藍澤 白珠	紅瑤	藍澤 白珠	紅瑤	藍澤 白珠	紅瑤	藍澤 白珠	紅瑤	藍澤 白珠



蒼山風 力強い表現、大胆な作
墨色の美、力強い表現
造形美、筆先舞う
重厚な線、力強く躍動
表情豊かな美しい作品

和成子 潤渾の線、動き見事
細い線の集合、響きあり
長鋒運筆大きく良作
力感溢れる筆致豪快な作
紙面の制圧、秀作

選評 大石 仙岳

美悠 大らかで生氣あり
余白美しく安定した作
自由な筆捌き、表情豊かな
文字造形も自然で温雅
穏やかな情趣下部墨量望む

茉莉音 難しい表現に挑む心意気
静かな情景浮ぶ穏和な作

紅霞 素朴と繊細な線の共演
淡墨の滲みと構成の妙
爽やかな空氣が流れる
軽妙な筆致、清々しい作
素朴に堂々と書き切った

光博 伸びやかな運筆で明るい
筆力充実、構成力冴える
感性豊かな作
気負いない運筆で爽やか
表情豊かに詩情を表現

選評 熊谷 宗苑

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 三浦鄭街 白石和楓 倉林紅瑤

小品の部

現代詩文書 (宗苑社)

白井真理

「金子みすゞの詩より」



白井真理書

35×135cm

◆気字大、太細、潤渾のバランス良く躍動感が漲っている。太線の活躍と、鋭い細線が調和した安定作。

(和楓評)

前衛書 (秀水會)

青木かよ
「郷」



135×35cm

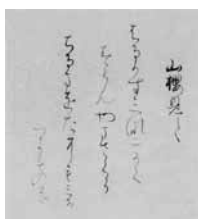
◆瞬発力ある筆が紙面に躍動。大きなリズムと潤渾の変化を生み出し、意欲的な作となった。(紅瑤評)

青木かよ書

臨書 (宗苑社)

茂木絢水
「升色紙」

部分拡大



◆古筆の際立つ濃淡を明確に表現し、特に渴筆のソフトな円やかさに力量が覗く。熟した臨書例となる。

(洋子評)

茂木絢水臨



135×35cm

漢字 (もくせい)

森田藤谷
「七言二句」



137×35cm

◆七言二句を軽やかなリズムで明るく仕上げた。いつもの作風とは異なり、表現の幅の広さを感じた。

(鄭街評)

森田藤谷書

〈小品の部〉

創作の部(39点)

漢字 5点

かな 1点

現代 1点

篆刻 1点

前衛 11点

臨書の部(41点)

漢字 38点

かな 3点

総出品点数

80点

〈特選候補者〉

〈創作の部〉

「漢字」

四枝及川 豊流

「かな」

白珠相内 珠莉

「現代詩」

蓉花澤 喜代美

青蓮 伊藤 有津

蓉花 柴田 真由美

四枝 塚田 美翠

「前衛」

秀恵 阿部 雅悠

紅瑤 松本 秀皋

大拙 佐藤 陽子

「篆刻」

石心 大沼 樵峰

「臨書の部」

「漢字」

高真 岩上 郁子

澄春 安藤 麗華

八街 十河 春景

若葉 工藤 山房

澄春 深澤 佳月

香石 佐藤 香石

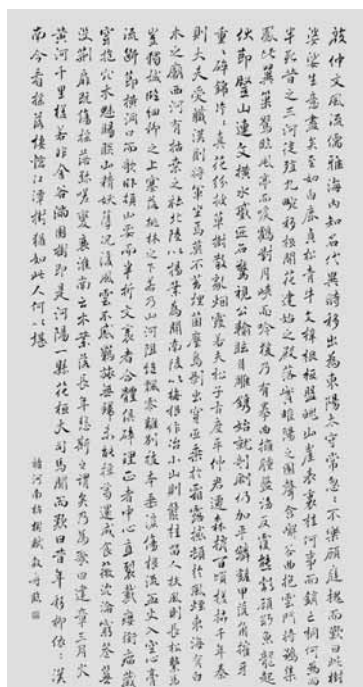
墨縁 井戸端 琉泉

琴成 大枝 香苗

京橋 前浜 裕香

大作の部

臨書 (千葉) 竹浪叙舟 「枯樹賦」

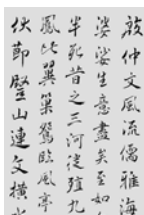


竹浪叙舟臨

136×70cm

◆枯樹賦を全紙に14行で表現。密度の濃い高水準の臨書作品で字間行間の絶妙のバランスも見事。
(鄭街評)

部分拡大



現代詩文書 (八戸) 市川紫泉 「石川不二子の歌」



市川紫泉書

180×60cm

◆懐の広い漢字のゆとりに、かなの落ち着いた線がマッチし、2行のバランスが見事な縦作品。
(和楓評)

前衛書

(大拙社) 大庭幸石「新涼」



180×45cm

◆上部の漲る筆力が印象的。潤渾の変化と飛沫が効果を発揮し、明るく爽快な作となった。
(紅瑠評)

大庭幸石書

かな (奥田)

藤田美泉
「あふことの」

部分拡大



36×135cm

藤田美泉書

◆光沢のある料紙に伸びやかなリズムが爽快に流れる。貼り混ぜではあるが4枚が連なって古へと導く。
(洋子評)

〈大作の部〉

創作の部(34点)

漢字 3点

かな 9点

現代 4点

前衛 18点

臨書の部(20点)

漢字 20点

かな 0点

総出品点数
54点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

千桜 金子 美千

「かな」

水荃 清水 蘭舟

奥田 橋本 翠風

玉松 橋本 紅霞

〔現代詩〕

華祥 加藤 雅芳

〔前衛〕

月華 中塩 朱華

容洲 阿部 邑里

玉州 遠藤 和香

秀水 門脇 信子

紅瑠 廣田 紫

紅瑠 佐藤 成美

〔臨書の部〕

〔漢字〕

紅瑠 木暮 千晶

大雲 鷺山 美梢

英峰 佐藤 桂香

土気 西澤 瑠美

八街 大日向 幽香

澄春 新行 内芳蘭

英峰 吉瀬 彩雨

紅瑠 相澤 敦子

漢字研究部
(枯樹賦)

選評 小 浜 大 明

今月のホープ作品



阿 部 悦 子

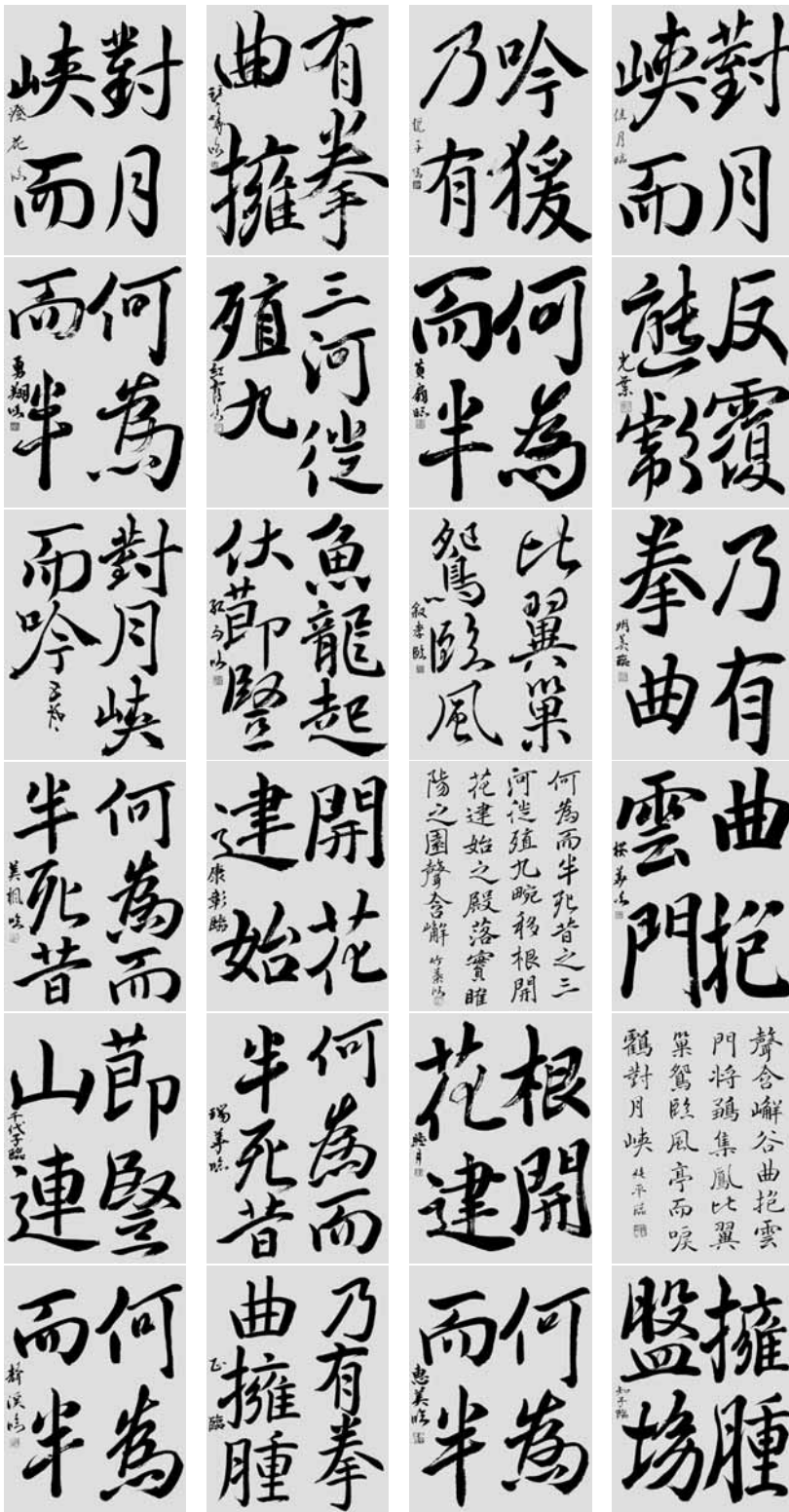
漢字研究部 特選 阿 部 悦 子

画から画への筆脈のつながりが運腕大にして明るいリズムを生んでいます。また、懐も広く明快な臨書作品に仕上がっています。その上、俯仰法の用筆も正確に理解した上で書かれた秀作です。

◎漢字研究部総評

多数の出品作品の殆どに誤字もなく、努力作ぞろいで審査に苦慮しながらも、楽しく拝

見することができました。ただ、「古典鑑賞」の解説にもある俯仰法の用筆を正しく理解されていない作品も少なくありませんでした。古典を学ぶ上で基本的な用筆法はぜひ知っておいていただきたいと思っています。その他、紙面に対しての文字の大きさや、線の太さは、余白の美を表現するためには大切な要件だと思います。



静 千 美 吾 勇 小
代 子 楓 風 翔 遥
溪 子 楓 風 翔 遥

正 瑞 康 紅 紅 琴
枝 華 彰 雨 霞 燦

恵 睦 竹 叙 黄 悦
美 月 葉 孝 扇 子

知 純 桜 明 光 佳
子 平 華 美 葉 月

●篆刻

【十月十五日締めきり】

〈出品規定〉審査会員を含む、誰でも出品可。

①摹刻 (ア)課題による語句 (イ)原印自由

(出品の際、原印のコピー添付)

②創作 語句自由

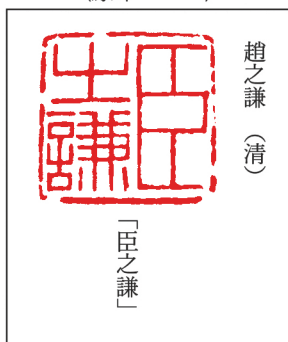
○印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。

○印箋は市販のもの、半紙横 $\frac{1}{2}$ の大きさに切ったものも可。

○創作、摹刻とも応募は一人一点。

9月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



趙之謙 (清)

「臣之謙」

◎出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款(氏号)を入れる。

735号篆刻優秀作品

篆刻



「遂生」

特選 成田能喜
やや書線に重さはあるが、細部にまで良く原印を観察している。

選評 後藤大峰

創作



「朋友」

特選 塚田美翠
印、全体の構成は佳、少し刻線に軽さが否めなかったのは残念。

◎篆刻部総評

篆刻作品に秀でた作品があり全体にレベルの高い作品が多く感じられた。創作の中には、やや首を傾げる作品があり今後の課題か。

(大峰評)

(篆刻)

秀作 (50音順)	特選	佳作 (50音順)
大雲 小沢 華仙 遊雲 小野寺 幸喜 芳琴 中川 研一 小中 林 淳一	北日 成田 能喜	小映 金谷 皓洋 大雲 鷺山 美梢 蒼原 庄司 櫻空 文筆 関谷香代子
入選 (50音順)		
大綱 片岡 豪峰 香書 須賀澤 一起 (選外1名氏名略)		

(創作)

秀作 (50音順)	特選	佳作 (50音順)
石心 大沼 樵峰 生空 坂本 覚山 粹仙 中晶 義則 藤井 龍仙	四枝 塚田 美翠	唯一 逢沢 唯一 水堅 伊澤 香雨 富見 野木 紫蘭 宗苑 やま 橋本 清麗 茂木 絢水
入選 (50音順)		
遊雲 赤星 文庵 声香 荒川 空華 宮内 成子 (選外なし)		

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田一ー一六ー七
東神田ブラザビル三階

公益財団法人 書道芸術院

電話(〇三)三八六二ー一九五四
FAX(〇三)三八六二ー一九五七

※お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日(金曜日九時)十七時の間
にお願いします。(土日・祝日は休み)

コロナ禍の中、当分の間十時
十六時に時間の変更しております。

送料

一か月の購読部数

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

令和四年 八月二十五日印刷
令和四年 九月 一日発行

定価 一部 七五〇円

編集兼 下谷洋子

発行人 株式会社 リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一ー一六ー七
電話(〇三)三八六二ー一九五四
FAX(〇三)三八六二ー一九五七
振替 〇〇一五〇四一三五一五八
振替 〇〇一五〇四一三五一五八
http://www.lincs.co.jp/shogei/